

## §2 文 献



# 1 ローマ字教育の指針 (昭和22年2月)

## 第1 ローマ字教育の必要と方針

- 1 ローマ字は現在世界の多くの国家で、その国語を書き表わすために使われている。従ってローマ字は世界共通の文字であり、これが相互の理解を進め、国際社会をうち立てる上に役立っていることはいうまでもない。

わが国でも、これまで国民の一部では国語をローマ字で書き表わし、国語および国情を世界各国民に理解させるのに役立たせて来たが、これからさらに新しく国際社会の一員として更生するためには、国民一般がローマ字で自由に国語を読み書きする能力および習慣を持つことが必要である。ここにローマ字教育を行う理由の第一がある。

- 2 ローマ字は、本来言語をうつすのにすぐれた機能を持つばかりでなく、書写・印刷等の実際において、能率の高い文字組織である。わが国民一般がローマ字で国語を書き表わし、ローマ字で多くの文献が印刷される社会習慣ができれば、社会生活の能率はいちじるしく高められ、一般国民の文化水準も高められるはずであって、このことが早く一般化することは、わが国の再建に望ましいことである。これが国民一般にローマ字教育を行う理由の第二である。

- 3 ローマ字は、国民一般に国語の特質・構造に関する正確な知識およびこれを自由に使う能力を得させるのに役立つことが多い。漢字・かなにもそれぞれ有利な特質があるが、またローマ字には単音文字として独自の機能がある。ローマ字を使用することによって、わが国民の国語能力および国語教養は、いちじるしく高められる。これが国民一般にローマ字教育を行う理由の第三である。

ローマ字教育を行う必要と理由は、他にも考えられるが、その重要な点は、およそ右の三つに要約されよう。そうしてなるべく速やかに国民一般がその利益を得るためには、国民学校の児童にこれを学ばせる必要がある。

- 4 ところで国民学校でローマ字教育を行う上には、どういう方針をとるべきか。

国民学校の児童は、ローマ字による国語の読み書きを習得することによって、国語の音韻についての自覚、国語の構造ならびに機能上の特質についての理解を深めることができ、また成人社会における表記形式と同じ表記形式を速やかに身につけ、文字組織のやさしさから、多くの語を習得する便宜を受ける。

それ故にローマ字教育は、かな漢字まじり文による国語教育と並行して行われるが、その眼目は、国語教育の徹底・充実ということに求められるべきである。ここに国民学校におけるローマ字教育の根本方針がある。

- 5 右の根本方針に関連して留意すべきことは、かなおよび漢字による国語教育との関係である。かなを専用にするか、漢字を一部存するか、全部廃するか、ローマ字を専用にするか等の問題は、今にわかに定められるべきことではなく、学術上の研究、国民一般の習慣・感情、国民一般の使用した上での経験等の各種の問題を考え合わせた上で、他日国民一般の総意により、自発的に決定されるべきである。すなわち、ローマ字教育の方針・目的は、かな漢字まじり文による国語教育の存在を一方に認めながら、ローマ字による教育の独自の効果をあげることに専念し、国民の国語能力・国語知識を高めることにある。

- 6 なお、ローマ字が英語その他の外国語に用いられているために、英語その他の外国語を授ける前提として、ローマ字による国語の読み書きを教えようという考え方もあるが、これは、まったく誤りであって、ローマ字教育はあくまでも国語教育のために行われ

るものとして考えなければならない。

## 第2 教 材

教材の選択および配列にあたっては、次の諸点に留意する。

- 1 国語のローマ字による表記法を訓練する。
  - (1) 学習の初期にあたっては、児童生活における基本的な表現形式をローマ字書きで示し、その読み方・書き方に習熟させる。
  - (2) ローマ字のあらゆる場合の表記のし方を自然に順を追って提出し、無理のないように習得させる。(よう音・つまる音・はねる音の表記、句読点の使用法、節のまとめ方などには特に注意する。)
- 2 標準語または標準語的な表現を用いる。

表音文字であるローマ字の特質にもとづき、教材は、つとめて標準語または標準語的な発音・語法により、正しい国語の教育に役立たせる。
- 3 語学的の興味をおのずと持たせるように配意する。
  - (1) 動詞・形容詞の活用、その他の語法的事象を理解させる。
  - (2) 韻文教材では、韻律の表現について理解させる。
- 4 教材はなるべく児童の生活から生れたものを選び、教科書に親しみをおぼえさせると共に、読解力の増進をはかる。そのためには生活童話・詩・日記・観察記録なども適当であろう。

## 第3 指 導 法

- 1 かな漢字まじり文による国語教育との関連
  - (1) 国語教育の指導には、音声言語と文字言語との両方面があり、国語教育の目的は、主として日常の国語を習得させ、その理解力と発表力とを養うにある。国語教育の一部として新たにロー

マ字教育を採用するのも、この目的をなしとげて一層の効果をあげ、あわせて国語の純化に役立たせようとするにある。ローマ字教育を行うにあたっては、常に児童の国語意識に注意し、その現実に即して指導法を立案すべきである。

- (2) ローマ字が単音文字であるという特質を生かし、その表音性の適切な指導により、国語の音韻の有機的な構成を明らかにし、国語教育の一面である音声言語の訓練に役立たせなければならない。
- (3) ローマ字教育を原則として、第4学年から行うとすると、この期間の児童は、第3学年までの国語教育によって、初等科における漢字の過半数と、ひらがな・かたかなをおぼえ、かな漢字まじり文の理解・表現にも一応習熟し、初歩的ながら国語意識をもち、基本的な言語力・文字力が身についているから、この事実注意到して現実にかなったローマ字教育を行い、さらに高次の国語訓練をなすべきである。
- (4) ローマ字は表音文字であるから、ローマ字教育によって生きた言語生活に直接結びついた音声化ができ、音の上から国語意識を明確にすることができる。またローマ字文は、分ち書きで書かれるから、単語意識をはっきりもたせ、国語構造に自覚を与えるなど、文法的訓練にも役立ち、形の上から国語意識を明確にすることができる。かように分節をはっきりすることによって、文章構造の意識と思想の筋道をはっきりする。すなわちローマ字教育は、以上のような点で、国語意識を明確にし、したがって、文体意識をも明確にするものであるから、ローマ字で文章を書くことにより、従来のかな漢字まじり文の表現形式にかかわることなく、耳で聞いただけで意味のよくわかる文章を書くようになり、新しい文体の成立が可能になる。かような点にも十分留意して指導すべきである。

## 2 ローマ字文の読み方の指導

- (1) ローマ字は単音文字であるために、とかく音声表現的な方面に教授者の注意が向けられやすく、したがってローマ字で書かれた語がその意味に結びつかないきらいがある。ローマ字で書かれたものを読む筋道は、視覚的な語表象が、語の音表象を呼び起し、それがなからだちになって語の意味がわかるという順序である。つまり、ローマ字で書かれた文なり語なりを見て、すぐに意味がわかるようにすることが、ローマ字文の読み方教授の目標であり、ここに第一義的な重点が置かれなければならない。
- (2) ローマ字で書かれた語を音節や単音に分解して教えることは、児童がまだ習わない単語でも、自身で読み書きすることができるようにするための必要な手段ではあるが、それは児童がローマ字に慣れてくるに従って、自然にできてくる語形と語形とを比べ合わせる力に相応して、会得できるように指導すべきである。これには同じ語形や共通した部分をもつ語形をくり返して使用することが必要である。
- (3) ローマ字を教えるについては、音声言語から直接に与える方法と、かなをなからだちにする方法とが考えられるが、ローマ字の特質の一つは表音性にあり、また表記されたものを音声化するにも特色があるから、音声言語から直接にはいる方が、ローマ字の特質にもかない、国語を純正にするためにも、効果がある。ただ、あまりこまかい所に注意しすぎると、いつまでも拾い読みの段階に止まりやすいので、その点にも気をつけなければならない。かなをなからだちとする方法は、児童の既得知識を利用するために、音節的にローマ字を教えるには役立つが、それではかなの表記法にとらわれて、ローマ字文に習熟しないおそれがあり、また、かなづかいの制約が直接にローマ字にかかることにもなるから、かなをなからだちとせず、音声言語から直接に教える方法をとる方が適當である。

### 3 文字および文章の書き方

- (1) ローマ字には、印刷体と筆記体とがあり、両者は相当に字形がちがうから、児童にとって、はじめはその理解が困難であり、混乱を生じやすい。それでまず印刷体の読み書きを一通りのみこませてから筆記体にかかった方がよい。
- (2) ローマ字で文章を書く場合、思うことを正しく、早く、美しく文字に表現することができるようにしなければならない。書こうと思う語をすぐそのまま文字に表現し、しかもそれが社会的約束からはずれたものでないようにすべきである。書こうとする語形が、文字に書かれる前に頭に浮んでいるくらいになれば申し分がない。音に頼って書くことは、慣れていない語を組み立てる時には必要であるが、音にたよらずに語を文字にうつせるまでにすることが必要である。それ故、特別な努力を払わないでも、ローマ字で書くことができるようになるまで習熟させなければならない。
- (3) ローマ字で文章を書く場合、従来のかな漢字まじり文の文体にかかわることなく、ローマ字文としての新しい文体を作り出すように指導すべきである。ローマ字としては、だらだらと長く続いた文章は意味がとりにくい。また、耳なれない漢語や同音異義語などの使用も、避けなければならない。ローマ字文としては、簡潔で、すなおな、意味のよく通るものが、最も望ましい。ローマ字文の作文指導にあたっては、そういう新しい文体の創造にも心がける必要がある。



## 2 改訂 ローマ字教育の指針

(昭和25年3月)

### 第1 ローマ字教育の必要と方針

国語をやさしく、そして、耳で聞いてわかるようにし、教育・学問をひろめ、民主的・文化的な国民を育て上げるためには、いろいろの手段があろうが、その一つとしてローマ字教育を行うことが必要である。

- (1) ローマ字は表音文字であるから、文字にこだわらずに直接にことばの意味を理解させることができ、したがって、表意文字である漢字の場合よりも、書きことばに対する反省を強め、やさしく、わかりやすいことばを書いたり、話したりさせることに役だつ。また、ローマ字は単音文字であるから、国語の音韻的ならびに文法的構造に関する自覚を高め、美しく、正しい国語を自由に使う能力を養うことができる。
- (2) ローマ字は、書いたり、印刷したりするのに、能率の高い文字組織であるから、ローマ字を多く用いる社会習慣ができれば、社会生活の能率、一般国民の文化水準が高められる。
- (3) ローマ字は現在、世界の多くの国が、その国語を書き表わす文字として用いているから、わが国民一般がローマ字で自由に国語を読み書きする能力および習慣をもつようになれば、それだけ国際的な活動を容易にし、国際間の理解・親善を深めることができる。
- (4) ローマ字は字画が簡明であるから、児童・生徒の近視を予防し、学習の際における姿勢を正しく保つためにも有利である。したがって、ローマ字の普及は国民の保健・衛生の立場から見ても望ましいことである。

ローマ字教育の必要な理由は、だいたい以上のようなものである。初等教育機関はもとより、その他の学校でもローマ字教育を行

い、速かに国民一般がその利益を受けるようにする必要がある。

ローマ字教育を行うにあたっては、ローマ字によって国語の音韻的ならびに文法的構造に関する理解を深めるとともに、また、やさしい文字組織を利用して、多くのことばを習得させ、国語の理解力と表現力を高めるように指導することを根本方針とすべきである。なお、ローマ字教育は、英語その他の外国語を教える前提として行うという考え方もあるが、ローマ字教育はあくまでも国語教育の一環として考えられなければならない。

## 第2 教 材

教科書を選定したり、教材を選んで配列したりする場合は、次の点に注意する。

### 1 国語をローマ字で字で書き表わす方法を訓練する。

学習の初期 30 時間ぐらひは、児童・生徒の生活に即した単語や文の形をローマ字書きで示し、その読み方・書き方に慣れさせる。特に次の点に気をつける。

(1) 国語を表わすに必要な字母は、指導の初期 20 時間ぐらひまでにひととおり提出する。教科書に現われたものだけで不十分な場合には、日記や生活経験記録、組の児童・生徒の名まえなどによって補う。

(2) 国語の音の表わし方が、自然にもれなく習得できるようにする。すなわち直音・よう音・つまる音・はねる音・長音などを含む単語によって、その読み方・書き方に慣れさせる。

(3) ローマ字文のあらゆる表記のしかた、たとえば、大文字や符号の使い方、分かち書きのしかたなどを無理のない方法で学習させる。

### 2 正しい国語・美しい国語を習得させる。

(1) 表音文字であるローマ字の特質を生かして、標準語的発音を指導できるように、教材はつとめて標準語を用いなければなら

ない。

- (2) 同音異義で誤解を起しやすいことばや、耳慣れない漢語を避け、耳で聞いてすぐにわかることばを使うように心がける。
- (3) 文章は簡明で生き生きしているものがよい。漢語を避けようとして、とかく、くだくだしい表現に陥る恐れがあるが、この点は十分に気をつけなければならない。

### 3 表現力・理解力を訓練する。

日常の言語生活に自由に応用できるように、話し方、聞き方、読書のしかた、記録のしかた、日記の書き方、手紙の書き方などに取材する。

### 4 国語のもっている法則・性質に対する科学的興味を起させるようにする。

- (1) 動詞の活用、複合語、複合語における連濁、音便等の言語現象を理解させる。

#### 例1 動詞の活用

{	(読む: <u>yoma</u> → <u>yomi</u> など)	<u>ma</u> , <u>mi</u> , <u>mu</u> , <u>me</u> , <u>mo</u>
	(取る: <u>tora</u> → <u>tori</u> など)	<u>ra</u> , <u>ri</u> , <u>ru</u> , <u>re</u> , <u>ro</u>
	(買う: <u>kawa</u> → <u>kai</u> など)	<u>wa</u> , <u>i</u> , <u>u</u> , <u>e</u> , <u>o</u>

#### 例2 複合語

{	sake+ya → sakaya	<u>ka</u> , <u>ki</u> , <u>ku</u> , <u>ke</u> , <u>ko</u>
	ine+taba → inataba	<u>na</u> , <u>ni</u> , <u>nu</u> , <u>ne</u> , <u>no</u>
	koe+iro → kowairo	<u>wa</u> , <u>i</u> , <u>u</u> , <u>e</u> , <u>o</u>

#### 例3 複合語における連濁

{	asa+kiri → asagiri	ka, ki, ku, ke, ko
		ga, gi, gu, ge, go
{	naki+koe → nakigoe	ka, ki, ku, ke, ko
		ga, gi, gu, ge, go

$$\left| \begin{array}{l} \text{kusa} + \text{hana} \longrightarrow \text{kusabana} \left\{ \begin{array}{l} \text{ha, hi, hu, he, ho} \\ \text{(fu)} \\ \text{ba, bi, bu, be, bo} \end{array} \right. \end{array} \right.$$

#### 例4 音 便

$$\left\{ \begin{array}{l} \text{yomite (ta)} \longrightarrow \text{yonde} \\ \text{arigataku} + \text{gozaimasu} \longrightarrow \text{arigatô gozaimasu} \end{array} \right.$$

(2) 詩・歌・童謡などの韻文教材では、韻律の表現について理解させる。

- 5 なるべく児童・生徒の生活に取材し、教材に親しみを覚えさせるとともに読解力の増進をはかる。

### 第3 指 導 法

#### 1 話し方の指導

- (1) われわれが正確な文章を書き、または書かれた文章を読んで誤りなく理解するはたらきは、他人の話を聞いて正しい表現を感覚的に知ることから始まるのである。

ここに、初期の国語教育における話し方の重要性があり、この点はローマ字教育においても同様である。

ことに、ローマ字教育の初期においては、児童・生徒にとって見慣れないローマ字で書き表わした単語・句・文はそれを読んだ時に意味が直ちに理解できない恐れがあるから、まず、話し方によってそれらの単語・句・文に十分に親しみをもたせてから、ローマ字で書き表わしたものへ自然に導いて行くことがたいせつである。

- (2) 入門期の30時間ほどは、毎時間読み方の指導にはいる前に、話し方の指導をすることが、特に重要である。〔時間配当については、「第四 学習時間の配当」の項を参照のこと。〕

話し方の材料としては、その日に指導すべき新出の単語、新しい用法の単語、新しい句・文の形などを取り上げる。そして

それらが用いられなければならない適当な場を作り、話し合っている間に自然にそれらが使われるようにする。

たとえば、話合いのなかに、それらの単語・句・文に関係のある問を発したり、絵や実物を見せたり、物語にして聞かせたりする。そして教師はそれらの新出の単語・句・文を黒板に書いたり、カードを用いたりしてその語形を示し、語形を語音と意味とに結びつけさせる。

- (3) こうして指導された単語・句・文がほんとうに児童・生徒の身についたか、どうかをためすために、それらを使って自由に文を口で言わせてみる必要がある。ほんとうに自分のものとなっているなら、それらを正しく使って話ができるようになる。このようにすれば話す力もつき、作文の力もつくのである。

## 2 読み方の指導

正しい読み方というのは、単語の形が目にはいつてくるにつれて、その文の内容が読む人にそのまま直ちに理解されることである。数個の音節でできている単語を読むのに、一つ一つの音節を読んでから、それらの音節を結びつけて、その単語の意味を知るといような読み方は正しい読み方とはいえない。語形が目にはいると、すぐその表わす意味がわかるようにはじめから指導する必要がある。

- (1) 指導法には次のようなものがある。

- (a) a, b, c などの文字の形とその呼び名から教え始める方法。

この方法では、1字1字の形と呼び名とがわかっても、単語の中にある時の音は別に教えなければならない。この方法によると、たとえば、ジー(g), ユー(u), アイ(i), エー(a) といような文字の呼び名とそれらの文字の単語の中における発音とが混同されるために、書き方の時、

「自転車」を  $\left\{ \begin{array}{l} \text{gitensya (訓)} \\ \text{gitensha (標)} \\ \text{Gitensya (日)} \end{array} \right\}$  と書き,

「牛乳」を  $\left\{ \begin{array}{l} \text{gûnû (訓・標)} \\ \text{Gûnû (日)} \end{array} \right\}$  と書き,「書いて」を「kita」

と書くような誤りを生ずる恐れがある。

(b) 1字1字とその表わす音とを結びつける方法。

たとえば, t を ト, a を ア, b を ブ, e を エ などと教えるのであるが, 児童・生徒に 1字1字の表わす音を教え, 記憶させることは, 興味のない仕事であり, たとえ, 1字1字の発音を覚えたとしても, それらを結びつけて一つ一つの音節の正しい発音を覚えるのは困難であり, したがって「tabeta」を「トアブエトア」と読むような誤りを起しやすい。

(c) a, i, u, e, o; ka, ki, ku, ke, ko; ... というような五十音図によって教える方法。

この方法で教えると, ローマ字がかなと結びつくから, ローマ字で書く時,

「学 校」を  $\left\{ \begin{array}{l} \text{gatukou (訓)} \\ \text{gatsukou (標)} \\ \text{Gatukou (日)} \end{array} \right\}$

「急行列車」を  $\left\{ \begin{array}{l} \text{kiyuukouretusiya (訓)} \\ \text{kiyuukouretsushiya (標)} \\ \text{Kiyuukouretusiya (日)} \end{array} \right\}$

と書き誤る恐れがある。また, この方法ばかりによると, 読む時にも, たとえば, 「サ・ク・ラ・ガ・サ・イ・タ」のように音節ごとに区切って読む癖がつく。これではローマ字文をすらすらと速く読む習慣がつきにくい。

(d) 1語1語の単語の読み方から教える方法。

これは初期の指導としては, 一つの指導法であるが, 単語

が読めたからといって、文が読めるとは限らない。一定の順に並んだ単語を文法的に処理して、その意味をつかむ力はまた別のものであるから、単語を読む練習に力を入れすぎると文の理解力がそこなわれる。

(e) まず、文章からはいり、適当な時期に音節に分解する方法。

ある一つの単語がいろいろの場面や位置に用いられているいくつかの文章を与え、それらの文章をくり返し読ませて、その特定の単語をはっきりと意識させた後、その単語を取り出し、その単語についての読み書き、および、用い方などを十分に練習させる。

このような単語の数をだんだんふやしていくと、字数の少ないローマ字では語形の似たいくつかの単語に出合う。そこで形の似ている単語をはっきりと区別して意識させることが必要になる。

このようにして、単語の語形の相違と、語音の相違との関係を明らかにするために、単語をさらに、音節に分解し、一つ一つの音節について、その発音を教えるのである。

分解を始める時期は、これらの十分に練習をした単語の数が60語前後になったころが適当であろう。しかしながら、必ずしも、この時期から始めなければならないというわけではなく、それ以前でも、教師が適当と認める機会があったら、音節の分解を行ってもさしつかえない。たとえば、inu, ko-inu; neko, koneko という単語が出てきた場合には、互に無関係な単語として教えないで、それらを比較して、「ko」という音節を抽出して示すのである。この音節の分解の指導が終ると、児童・生徒は習わないことばでも、自分で自由に読むことができるようになる。

(2) (e) による指導法では、次のことに注意しなければならない。

(a) 教科書は児童・生徒が自分自身で読むべきである。教師が

読んで聞かせ、それをただ口まねさせることは、児童・生徒にほんとうに読みの力をつけることができなくなる恐れがある。このためには、ローマ字文をひととおり読めるようになるまでは話し方の時に、新しい単語・句・文の指導を十分にしておくことが必要である。

- (b) 新しい単語・句・文の指導を有効に行うためには、毎時間に提出する数を制限したほうがよい。だいたい、新しい単語の数は、

第 1 時間～第 5 時間	3 語～ 4 語
第 6 時間～第 10 時間	4 語～ 5 語
第 11 時間～第 20 時間	5 語～ 8 語
第 21 時間～第 30 時間	7 語～ 15 語

ぐらいが適当であろう。

- (c) 初期の 15 時間ぐらいまでに教科書に出てくる単語は教科書でのくり返し回数を含めて、合計少なくとも 15 回はいろいろな条件で取り扱い、その単語を一目見て読めるようにすることが必要である。いろいろな条件というのは、その単語の黒板に書く位置を変えたり、いくつかの違った文脈の中で用いたり、次々の時間に取り扱ったりすることである。同じことばを同じ位置や同じ文の中で何回も機械的に読ませても効果が少ない。

- (d) くり返しは、単語ばかりでなく、文の形についても必要である。そして基礎的な簡単な形から、少しずつ複雑な形へ進んでいくようにする。

- (e) 読み方の指導にあたっては、読むこと自体を目的とするよりも、むしろ読む人自身がある目的を達するための手段として行うものであることを考えにいれておく必要がある。児童・生徒に文意を考えると、表現に注意するとかいうはっきりした目的を与えないで、ただ読ませるという指導はなる



べく避けたほうがよい。たとえば、同じ文を数度読ませる場合は、そのたびごとに別の目的を与えて、それぞれの目的が達せられるように指導する必要がある。

(3) 読む力を進めるには、次のような方法がある。

(a) 意味のつながりを手がかりにする方法。

例 Amari tenki ga ii \_\_\_\_\_, dekaketa.

noni ; nado ; node ; ga ; keredo

上の文の線の引いてあるところに下の単語の中から適当なものを選んで入れさせる。

(b) 語の構成を手がかりにする方法。

例 (i) { denki, dentô, denwa, densya, denpô (訓)  
          denki, dentô, denwa, densha, dempô (標)  
          Denki, Dentô, Denwa, Densya, Denpô (日)

(ii) { mita, mite, miru, minai  
          okita, okite, okiru, okinai

(c) 語形を手がかりにする方法。

語形とは単語を構成する文字の集まりが形作るその単語特有の輪郭（たとえば、Nippon という単語の **Nippon** という輪郭）のことである。その輪郭を一目見た印象から、その単語の読みと、意味とを直ちに理解できるように指導する。このためには、単語を記入したカード（共同学習用の大型のものや、個人用の小型のもの）を用いると効果的である。

以上の中で(a)は特に重要である。前に述べた音節の分解はこれらの方法に附随して新しい単語を読みこなす力を養う補助手段にすぎない。

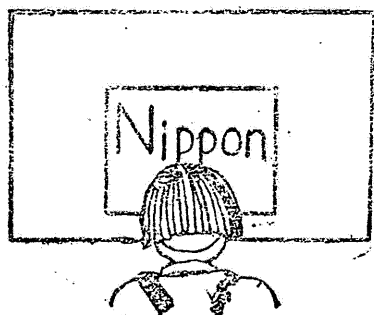
### 3 書き方および作文の指導

(1) 文字の書き方とその注意

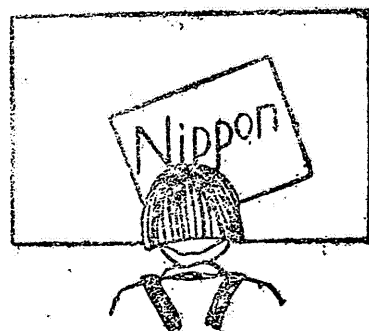
(a) ローマ字の字体には、印刷体・マヌスクリプト体・つづけ

字体の三つがある。入門期の40時間ぐらいいは印刷体・マヌスクリプト体で教えないと効果が上がらない。それは目で見ると、手で書く字形とが同じであるほうが覚えやすいからである。最初からつづき字体で教える指導法は避けたほうがよい。つづき字体は書く時の姿勢をくずしやすいから、上級になって、正しい姿勢の習慣がついてから教えたほうがよい。

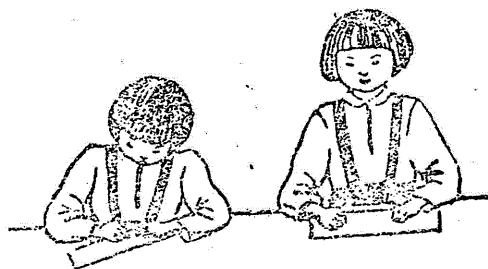
- (b) 初期の段階においては、文字は斜体でなく立体で書くほうが保健上よい。ノートはからだの正面に、まっすぐに置き、姿勢を正して書かせることがたいせつである。ただし、文字に習熟し、したがって、姿勢がくずれる恐れがなくなったら、ノートをやや右へ寄せ、 $15^{\circ} \sim 30^{\circ}$  ぐらい右肩上がりに置いてもよい。ローマ字文を書く場合に、とかく行が右上がりになる傾向が見られるから、初期のうちによく注意して、まっすぐに横に書く癖をつけることが必要である。



初期の段階においては、ノートはからだの正面に、まっすぐに置き、姿勢を正し、文字は立体で書かせる。

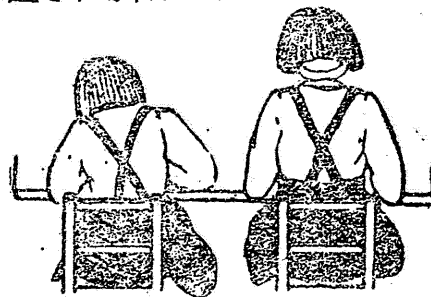


文字に習熟し、姿勢がくずれる恐れがなくなったら、ノートをやや右へ寄せ、 $15^{\circ} \sim 30^{\circ}$  ぐらい右肩上がりに置き、斜体で書かせてもよい。



第1図

第2図



第1図

第2図

最初からノートを右肩上がりに置き、斜体で書かせると、第1図のようにくずれた姿勢になる恐れがあるから、第2図のようにノートをからだの正面にまっすぐに置き、立体を用いて、正しい姿勢で書かせなければならない。

- (c) 目とノートとの距離は 30 cm ~ 40 cm が適当である。特に低学年では、けいとけいとの間隔の広い (12 mm 以上) ノートを使わせ、字はなるべく大きく書かせる。なお、使用する鉛筆は、B または 2B 程度のやわらかいものがよい。
- (2) 書き方の指導は、読み方と密接な関係を保ちながら行う。

(a) 入門期の前半約 25 時間の間は、読む練習が十分にできた教材を写して書かせる。その時、1 語を一まどめに書き、他の語から離して書く癖をつけることがたいせつである。

(b) 読む力がつき、写し書きが正しくできるようになったら、次に述べるような記憶書きの練習をさせる。それには、児童・生徒が読み書きともに十分にできるようになった語を用いた 3 語 ~ 4 語の短い文を黒板に書き、1 分間ほど指と腕で空間に書く練習をさせてから黒板の字を消し、次に教師は、その文をもう 1 度口で言って聞かせ、児童・生徒には何も見せないで、その文を書かせるのである。

児童・生徒が書き終えたら、教師は再び黒板にその文を書き、児童・生徒に自分たちの書いたのが正しいかどうかを確認させる。慣れるにつれて、単語の数を少しずつふやしていき、また、あまり慣れていない単語もあわせて練習させる。

このような練習を 10 時間ぐらい行ったら、よく読み書きのできる短文を何も見せないで記憶によって書かせる練習を始める。

(c) 記憶書きが十分にでき、読みがさらに上達し、音節の分解も終わったら、それまでに十分に練習のできている単語ばかりで書かれた文の中に、1 語 ~ 2 語ずつ新しい単語をまじえ、それが正しく書けるように練習させる。

このようにして、新しい単語が書けるように指導して行く。

(d) ローマ字文を書く時は、単語の語形を頭に思い浮かべ、まとまった形として文字に写せるようにすることがたいせつで

ある。その練習を十分に行って、はじめて文の内容を豊富にし、表現力を向上させる余裕ができてくるのである。

- (3) ローマ字で文章を書く場合、従来のかな・漢字まじり文体にかかわることなく、ローマ字文としての新しい文体を作り出すように指導すべきである。

耳慣れない漢語や同音異義で誤解を起しやすいことばの使用を避け、しかも言い換えの不適切から、だらだらと長く続いた文章にならないように注意し、簡潔で、すなおな、意味のよく通るような表現に心がけなければならない。

- (4) 書き方の指導にあたっては、単に、機械的な反復練習に陥らないように、児童・生徒の生活に即したものに取材し、児童・生徒が興味をもって学習できるように心がけることが必要である。

以上述べたように、指導法にはいろいろあるが、結局は学習過程における一要素にすぎない。

教師の熱意、児童・生徒の能力や努力が基本となり、その他の諸要素が加わって、はじめて教授の効果が現われるのであって、あらゆる場合に万人に共通する一定不変の指導法というものは、存在しないのである。

教師の関心と熟練の度合、児童・生徒の年齢、素質と努力、および学習が行われる言語的環境等によって指導法は変化すべきものであるから、絶えざる研究とくふうによって、各自の最善の方法を発見し、信念をもって実施して行くように努力してほしい。

#### 第4 学習時間の配当

入門期においては、時間の適切な配当によって、学習の効果を上げることができる。1週間に1時間というような時間配当では、教育効果が上がりにくいから、少なくとも、1週間に3時間を配当し、13週間～15週間続けて集中的に学習させるべきである。

# マヌスクリプト体

A B C D E F G H I J K L M

N O P Q R S T U V W X Y Z

a b c d e f g h i j k l m n o p q r s t

u v w x y z

Ban no gohan o taberu.

Suzume ga naite iru

## 3

## ローマ字文の書き方 (昭和22年2月)

## I つづり方

## 1 直 音

a	i	u	e	o
ア	イ(ヰ)	ウ	エ(ヱ)	オ

ka	ki	ku	ke	ko
カ	キ	ク	ケ	コ

ga	gi	gu	ge	go
ガ	ギ	グ	ゲ	ゴ

sa	si	su	se	so
サ	シ	ス	セ	ソ

za	zi	zu	ze	zo
ザ	ジ(ヂ)	ズ(ヅ)	ゼ	ゾ

ta	ti	tu	te	to
タ	チ	ツ	テ	ト

da		de	do
ダ		デ	ド

na	ni	nu	ne	no
ナ	ニ	ヌ	ネ	ノ

ha	hi	hu	he	ho
ハ	ヒ	フ	ヘ	ホ

ba	bi	bu	be	bo
バ	ビ	ブ	ベ	ボ

ma	mi	mu	me	mo
マ	ミ	ム	メ	モ

pa	pi	pu	pe	po
パ	ピ	プ	ペ	ポ

ya		yu		yo
ヤ		ユ		ヨ

ra	ri	ru	re	ro
ラ	リ	ル	レ	ロ

wa
ワ

## 2 よう音(拗音)

kya キヤ	kyu キユ	kyo キョ	gya ギヤ	gyu ギユ	gyo ギョ
sya シヤ	syu シユ	syo ショ	zya ジャ(ヂヤ)	zyu ジュ(ヂユ)	zyo ジョ(ヂョ)
tya チャ	tyu チュ	tyo チョ			
nya ニヤ	nyu ニユ	nyo ニョ			
hya ヒヤ	hyu ヒユ	hyo ヒョ	bya ビヤ	byu ビユ	byo ビョ
mya ミヤ	myu ミユ	myo ミョ	pya ピヤ	pyu ピユ	pyo ピョ
rya リヤ	ryu リュ	ryo リョ			

〔備考1〕 以上は、現代語で標準的と認められる音を、ローマ字で書きあらわす場合と、かなで書きあらわす場合とを対応して示したものである。

〔備考2〕 次のようなつづり方も必要に応じて習わせる。

shi (シ), chi (チ), tsu (ツ), fu (フ), ji (ジ, チ)  
sha (シャ), shu (シュ), sho (ショ), cha (チャ), chu (チュ),  
cho (チョ), ja (ジャ, チャ), ju (ジュ, チュ), jo (ジョ, チョ),  
di (ヂ), du (ヅ), dya (ヂャ), dyu (ヂュ), dyo (ヂョ),  
wo (ヲ, 助詞「を」にかぎる), kwa (クワ), gwa (グワ)

〔備考3〕 特殊な音の書きあらわし方については自由とする。

3 いわゆる長母音はその文字の上にやまがた「へ」をつけてあらわすか、または母音字を重ねてあらわす。ただし、「ていねい」  
「命令」などの「エイ」は ei とする。

obâsan	おばあさん	nêsan	ねえさん
Tôkyô	東京	ryôri	料理
kûki	空気	tyûi	注意

ôkii, ookii	大 き い	tiisai	小 さ い
teinei	て い ね い	meirei	命 令

- 4 はねる音は、すべて n であらわす。

sannin	三 人	sinbun	新 聞
denpô	電 報	kantoku	監 督
tenki	天 気		

〔注意〕 はねる音をあらわす n の次にすぐに母音字又は y が続く場合には、n のあとに切るしるし「'」を入れる。

gen'in	原 因	kin'yôbi	金 曜 日
--------	-----	----------	-------

- 5 つまる音は、次に来る子音字を重ねてあらわす。

Nippon	日 本	gakkô	学 校
kitte	切 手	zassi	雑 誌
ossyaru	おっしゃる	syuppatu	出 発
tyotto	ちょっと		

ただし次のような場合にはアポストロフ「'」を使って示す。

“A'” to sakebu.      「あっ」とさけぶ

- 6 文の最初の単語や固有名詞やその他必要のある場合には、その語頭に大文字を用いる。

Kyô wa kin'yôbi desu.      きょうは金曜日です。

Tôkyô	東 京	Huzisan	富 士 山
-------	-----	---------	-------

〔附記1〕 外来語は国語音のつづり方に従って書く。

inki	イ ン キ	naihu	ナ イ フ
tabako	た ば こ	ranpu	ラ ン プ

〔附記2〕 外国語（地名・人名を含む。）のローマ字つづりは、原則として原語に従って書く。ただし日本語風に呼びならわした地名・人名は外来語なみにあつかう。

## Ⅱ 分ち書きのし方

- 1 原則として単語はそれぞれ一続きに書き、他の単語から離し



て書く。

Suzusii kaze ga soyosoyo huku.

涼しい風がそよそよ吹く。

Kyô wa watakusi no tanzzyôbi desu.

きょうは私の誕生日です。

Kare wa eigo mo deki, sono ue Huransugo mo zyôzu da.

彼は英語もでき、その上フランス語もじょうずだ。

Iya, sonna kimoti wa nai.

いや、そんな気持はない。

〔注意1〕 いわゆる形容動詞と認められる語は、「だ」をはなして書く。

kirei da      きれいだ      zyôzu da      じょうずだ

〔注意2〕 複合語で一語としてまだ十分に熟していないものにはつなぎ「-」を入れる。

rigai-kankei      利害関係

hanasi-tuzukeru      話し続ける

ただし、一語として十分に熟したものには「-」を用いない。

hinoki      ひのき      amagasa      あまがさ

〔注意3〕 接頭語・接尾語は続けて書く。

otera      お      寺      massakini      まっ先に

anatagata      あなたがた      ronriteki      論理的

dorodarake      だろだらけ

ただし、接尾語で上の語に続けて書くと、意味のまぎれやすい場合には、離して書く。

Hanako San      花子さん      Tarô Kun      太郎君

Itô-Zirô Sama      伊藤次郎様

〔注意4〕 固有名詞は次のように書く。

Nippon Ginkô      日本銀行      Sumidagawa      すみだ川

Sakurazima      桜島      Tôkyôwan      東京湾

Tôkyô-to	東 京 都	Tiba-ken	千 葉 県
2	助動詞は続けて書くのを原則とする。		
kikaseru	聞か <u>せる</u>	misaseru	見さ <u>せる</u>
yorokobareru	喜ば <u>れる</u>	tasukerareru	助け <u>られる</u>
kakanai	書か <u>ない</u>	tabeyô	たべ <u>よう</u>
ikitai	いき <u>たい</u>	hanasimasu	話し <u>ます</u>
okita	起き <u>た</u>	moratta	もら <u>った</u>
yonda	読ん <u>だ</u>	mimai	見 <u>まい</u>
ikumai	行く <u>まい</u>		

〔注意1〕 助動詞「う」は接続する動詞・助動詞などによって、それぞれの行のオ段長音となる。

kakô	書 <u>こう</u>	sasô	差 <u>そう</u>	utô	打 <u>とう</u>
utaô	歌 <u>おう</u>	yomô	読 <u>もう</u>	urô	売 <u>ろう</u>
kogô	こ <u>ごう</u>	yobô	呼 <u>ぼう</u>		
desyô	で <u>しょう</u>	masyô	ま <u>しょう</u>		

〔注意2〕 助動詞「そうだ」「ようだ」は sô da, yô da のように、それぞれ「だ」を離して書く。

〔注意3〕 助動詞「そうだ」は様子・有様などの意味をあらわすものは、「そう」を前の語に続けて書くが、伝え聞く意味をあらわすものは前の語から離して書く。（次項参照）

arisô da	有 <u>り</u> そう <u>だ</u>	aru sô da	有 <u>る</u> そう <u>だ</u>
suzusisô da	涼 <u>し</u> そう <u>だ</u>	suzusii sô da	涼 <u>しい</u> そう <u>だ</u>

3 助動詞のうちで「だ」「です」「らしい」「ようだ」および伝え聞く意味をあらわす場合の「そうだ」などは、離して書く。

Are wa Huzisan da.

あれは富士山だ。

Huzisan wa utukusii yama desu.

富士山は美しい山です。

Mô minna kaetta yô da.

もうみんな帰ったようだ。

Kon'ya wa ame ga huru rasii.

今夜は雨が降るらしい。

Kono hon wa Yamada Kun no rasii.

この本は山田君のらしい。

Asoko wa taihen atui sô da.

あそこはたいへん暑いそうだ。

〔注意〕 接尾語の「らしい」は続けて書く。

Ano otoko wa itu made tattemo kodomorasii ne.

あの男はいつまでたっても子供らしいね。

4 助詞は、離して書くのを原則とする。

Kore wa watakusi no hon desu.

これは私の本です。

Koko wa, natu wa suzusii si, huyu wa atatakai.

ここは、夏は涼しいし、冬はあたたかい。

Kare wa, natu demo huyu demo zyôbu da.

彼は、夏でも冬でもじょうぶだ。

Tenki ga kuzureru na to omowaseru no ga kono kumo da.

天気がくずれる なと思わせる のがこの雲だ。

〔注意1〕 助詞「は」「も」が助詞「に」「で」に重なった場合には続けて書く。

Ue niwa ue ga aru.

上には上がある。

Dare nimo dekinai.

だれにもできない。

Tegami dewa osoku naru.

手紙ではおそくなる。

Kiku dake demo yoi.

聞くだけでもよい。

〔注意2〕 接続の「と」は続けて書く。

Haru ni naruto, tubame ga kuru.

春になると、つばめが来る。

〔注意3〕 禁止の「な」は続けて書く。

Ikuna yo.

行くなよ。

- 5 用言に附く助詞のうちで「ば」「ても」「でも」「て」「で」「ながら」「たり」「だり」などは続けて書く。

Yomeba wakaru.

読めば分る。

Mitemo wakarumai.

見ても分るまい。

Kusuri o nondemo naoranakatta.

くすりをのんでもなおらなかった。

Dôzo mite kudasai.

どうぞ見て下さい。

Ugokanaide kudasai.

動かないで下さい。

Nakinagara utatta.

泣きながら歌った。

Kodomotati ga detari haittari site asonde iru.

子供達が出たり入ったりして遊んでいる。

Tondari hanetari suru.

とんだりはねたりする。

### Ⅲ 符号の使い方

- 1 ローマ字文の中に用いる符号の主なものは、次のとおりである。

・	,	;	:	?
とめ	くぎり	おおくぎり	ふたつてん	といのしるし
	(コンマ)	(セミコロ)	(コロ)	

!  
つよめるしるし

( )	[ ]	“ ”	‘ ’	—
かっこ	かくがっこ	引用のしるし	ひとえの 引用のしるし	ぼう
—		,	へ	
つなぎ	きるしるし (アポストロフ)		やまがた	

- 2 「.」は文の終りに用いる。

Kyô wa ii tenki desu.

きょうはいい天気です。

〔注意〕「.」は、また略語を示す場合にも用いる。

N. H. K. (Nippon Hôsô Kyôkai)

日本放送協会

- 3 「,」は、一つの文の中で、語句の切れ目に用いる。

Hai, sô desu.            はい, そうです。

Amari tenki ga ii node, dekakete ikimasita.

あまり天気がいいので、でかけていきました。

- 4 「;」は「,」よりも大きな区分を示す場合に用いる。

Watakusi, anata, anokata; kore, sore, are; koko, soko,  
asoko nado wa mina daimeisi desu.

私, あなた, あの方; これ, それ, あれ; ここ, そこ,  
あそこなどはみな代名詞です。

- 5 「:」は、「;」で示す区分より意味の連絡のいっそう少ない  
区分を示す場合に用いる。

Kotowaza nimo iu: Saru mo ki kara otiru.

ことわざにもいう: さるも木から落ちる。

- 6 「?」は問いや疑いの文の終りに用いる。

Kore wa anata no desu ka?

これはあなたのですか。

Are wa nan darô?

あれはなんだろう。

- 7 「!」は、感動や命令の意味を特に強くあらわす必要のある場

合に用いる。

Mâ, kirei da koto !

まあ、きれいなこと

Hanako San, hayaku irassyai !

花子さん、早くいらっしゅい。

- 8 「( )」「[ ]」は、説明のための語句や補いの語句をそえる場合などに用いる。

Sensyû no nitiyôbi (3-gatu 17-niti), watakusi wa  
Yokohama e ikimasita.

先週の日曜日(三月十七日), わたくしは横浜へ行きました。

Kare wa sairen [no oto] ni bikkuri sita.

彼はサイレン [の音] にびっくりした。

- 9 「“ ”」は、語句を引用する場合や人のいうことばをそのままうつす場合などに用いる。

“Masao San, uguisu ga naite imasu yo,” to itte, nêsan  
wa mado o akemasita.

「正男さん、うぐいすがないていますよ。」といって、姉さんは窓をあけました。

Seisyo niwa, “Kami wa ai nari,” to aru.

聖書には、「神は愛なり」とある。

〔注意〕 引用文の中にさらに語句を引用する場合に、「‘ ’」を用いることがある。

- 10 「——」は、説明の語句をそえる場合などに用いる。

Itiban atarasii yôhuku —— kono aida tukutta bakari no  
o kite dekaketa.

いちばん新しい洋服 —— この間つくったばかりのを 着てでかけた。

- 11 「-」は、複合語で、まだ一語として十分に熟していない場合や、一語が二行にまたがる時に、その語が次の行に続くことを示す場合などに用いる。

rigai-kankei

利害関係

hanasi-tuzukeru

話し続ける

Mukasi, mukasi, aru tokoro ni ozii-  
san to obâsan ga arimasita.

むかし、むかし、あるところにおじいさんとおばあさんがあ  
りました。

〔注意〕 一語で二行にまたがる場合に、一つの音節の中途やはね  
る音の前では切らない。また、つまる音はかならず重なった字  
の間で切る。なお、切る場合は意味のとりやすいようにあつか  
う。

12 「'」は、はねる音 n とその次に来る母音字または y とを切り  
離す必要のある場合に用いる。(I. 4 注意参照)

13 「へ」は、母音字の上に附けて、その母音が長音であることを  
示す場合に用いる。(I. 3 参照)